

令和7年度 園評価

I 経営の重点に関わること 評価段階A：大変よくできたB：概ねよくできたC：あまりできていない D：できていない

重点目標	評価指標	園評価	改善策（来年度の具体的な取組目標等）	園評価
良さに気づき認め合う	「子どもの多様性」に気づき丁寧に関わる	低年齢児は生活リズムを尊重した担当制保育を意識し、幼児は友だちと活動する楽しさを味わえるよう展開した。保育者の意図が先行しすぎないように、園児主体の活動を心掛けた。	重点目標を「みとめあう（みんなちがってみんないい）」に変更。行事の組立てを再考し、子どもの「願い」を叶える時間を確保する。また、課題や葛藤も含めて認め合えるよう、職員会議での対話を深める工夫を行う。（継続的な意識向上を図る）会議の運営方法を見直し、報告事項の精選を図ることで、保育の質について語り合える時間を生み出していく。	A
	人権について考え、園児の想いを尊重している	人権擁護チェックリストの実施や「子どもの権利条約」の研修を通じ、全職員で意識を高めた。一人ひとりの想いを汲み取る丁寧な関わりに努めた。		A
	保育について、自己評価をし、振り返りをしている	公開保育を実施し、職員間で関わり方や環境設定を検討する良い機会となった。日誌の様式を変更し、経過を把握しやすくした。一方、会議での事務連絡が多く、保育内容を深める議論の時間が不足した。		B

II 施設の機能に関わること 評価段階A：大変よくできたB：概ねよくできたC：あまりできていない D：できていない

大項目	中項目	評価指標	園評価	改善策（来年度の具体的な取組目標等）	園評価
1 こども園における教育及び保育	(1) 0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	園の理念や教育・保育に沿った就学までの学び合い連続性	全職員が重点目標を共有し、年度途中の振り返りを通じて意識を継続できた。小学校との交流も進んだが、6年間を通した長期的な視点での援助については検討の余地がある。地域の小学校やこども園との交流を積極的に行わない就学についての情報の共有が出来た。	クラス単位だけでなく、園全体で子どもの育ちを共有する機会を増やし、就学前までの成長を見据えた援助について深めていく。クラス保育に加えて園全体の保育について職員間で話し合い、共有する機会を増やしていきたい。	B
	(2) 一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	園児が心地良く生活できている	個人面談や日々の対話で家庭との連携を図り、個々のリズムを尊重した。家庭と園でリズムが異なる場合も、無理のない範囲で調整を行うよう配慮した。	家庭において環境が異なることを理解し、それぞれの家庭に合わせた対応をする。午睡時間に眠れない園児は身体を休める時間とし、過ごし方等を工夫し、不適切な保育に繋がらないようにすることを意識していく。	A

	(3) 環境を通して行う教育及び保育	子どもがじっくりと遊ぶ環境を用意	各年齢に合わせて、子どもの姿や遊びの様子から成長に合わせた玩具の入れ替え、手作りおもちゃや素材を用意し、環境を変化させながら保育を行う事が出来た。 園庭で遊ぶ時間を確保し、季節を感じながら体を思い切り使って遊んだり、砂、水、虫などに十分触れたりして満足するまで遊ぶ環境を整えた。	引き続き子どもの興味・関心に基づいた環境を構成する。課題である「環境整備の時間」を確保し、職員間で遊びの再構成について協議する場を設ける。	A
2 安全管理・指導	事故防止・防災	安全最優先の訓練実施	子どもと職員が減災教育安全に参加した。毎月想定を変えた避難訓練を行い、年長・年中児とは「どう身を守るか」を共に考えるようになった。振り返りを通じて、多角的な避難経路の確認も行った。	異常気象等の変化に合わせ、研修を通じた意識向上を図る。また「減災教育」に保護者の参加を呼びかけ、家庭との協力体制を強化する。	B
	ケガ対応	迅速かつ適切な対応	受診判断や保護者連絡は状況に応じて適切に行った。昨年度（7.9%）より改善は見られるが、保護者アンケート（2.2%）で対応への不満の声も残っている。	ケガの状況や処置経過について、より丁寧で分かりやすい説明を徹底し、保護者の安心感に繋げていく。	B
3 保健管理・指導	健康教育の充実	給食を楽しみにしている健康に過ごすための支援	よく活動し、お腹を空かせて給食の時間に移る様にしている。 栽培やクッキングを行うことで食べる事に興味を持ち、食べる意欲へ繋がった。 玩具や室内の消毒を行い、手洗いうがいの習慣が身に付くよう援助した。	食育だよりの配信や給食サンプルの展示を継続して行い、楽しく食べる事の大切さを保護者とも共有していく。 偏食には個別に寄り添い、計画的な食育活動を推進する。 栽培やクッキングなどの食育を計画的に取り組んでいく。	A
4 特別支援教育・保育	支援体制づくりの推進	個々に合った支援	子どもの思いを十分に受け止め、一人ひとりに配慮するよう心掛けた。 視覚的な提示（イラスト等）や肯定的な言葉がけを工夫した。クールダウンが必要な際の居場所作り（職員室活用等）にも取り組んだ。	子どもの発達を職員が理解し、個々に合った工夫をしていく。落ち着ける時間や場所を確保できるように考えたい。 ケース検討会で周知したり、工夫の仕方について話し合ったりしていく。また、保護者対応についてもスキルを高めていく。	B
5 組織運営	組織体制の充実	役割に責任を持ち、他職員と連携をとりながら業務を行った	全体的な計画で分掌を示しているが、保育内容や環境構成等クラス内での協力体制は良好であったが、園全体としての役割分担の遂行には一部課題が残った。	互いに困りごとを相談しやすい職場環境を整え、業務の進捗状況を全体で把握・協力し合える体制を構築する。	B

6 研 修	研修体制の 充実	園内外の研修や 公開保育に参加 したり、外部の研 修に参加する他 個人で保育の質、 専門性の向上に 努めている	職員が研修する機会を計画的に設け、参加することで保育に活せる学びとなった。 園内研修では具体的な場面上げ、どんな風に関わると良いか意見を出し合うことで、応答的な関わりや丁寧に関わることに繋がった。 公開保育や階層別研修、外部講師による研修などを通して専門性が向上した。	研修はフルタイムの職員が参加することが多い。研修報告やWEB研修を活用し、全職員が学ぶ機会を設定していく。また、職員が意欲的に意見を出し合えるようにグループワークの時間を設けたり、少人数制での研修を実施したりするなど工夫していきたい。	B
7 教育・保育環 境整備	教育・保育環 境の充実	子どもの発達に 合わせた環境を 用意している	子どもに合わせた環境を準備し、記録をすることで振り返りが出来た。 ケガに繋がりそうだと感じた時には配置を変更したり、玩具を入れ替えたりして環境を整えた。 子どもがよく遊び劣化している玩具について、すぐに購入することが出来ず不足している物もある。	学年で捉えず、子どもの姿から発達の過程を確認し、どのような遊びが適しているかを考え準備する。玩具が足りていないことがあるので用意できるようにしたい。 クラス担任だけでなく他学年の保育者とも積極的に共有することを意識する。 ヒヤリハット事例を共有し、より安全な環境作りを継続する	B
8 家庭との連 携・協力	家庭への支 援機能の充 実	園での様子を発 信する 保護者と信頼関 係を築くように 努める	送迎の時に園での出来事を伝え、保護者とコミュニケーションを取ることに努めた。 園だよりやクラスだよりで子どもの育ちが分かる内容になるよう努め、写真を活用した掲示の作成も行った。 ホームページで園日記の掲載を開始し、不定期ではあるが園での出来事を発信できた。	丁寧な対応を継続し、おたよりの配信、個人面談等は継続して行っていく。 送迎時の会話は、担任が不在であったり、駐車場が込み合ったりしてしまうため、落ち着いて話せるよう、事前の予約相談制などを活用する。	B